

令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修

視察研修報告書

視察日 令和4年11月14日（月）～ 11月16日（水）

視察先

- （1）友好都市青森県三戸町議会（表敬訪問・研修・交流会）
研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」
- （2）原燃輸送株式会社
- （3）日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設

視察研修報告書

氏名 植田博巳

研修名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研修先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
<p>1 青森県三戸町</p> <p>(1) 三戸町議会には3度目の訪問であったが、前回に引き続き大歓迎を受け友好都市として強い絆を実感した。友好都市としてお互いの市町における課題解決と特産物交流に加え、勝間田城跡と三戸城跡の山城交流提案させていただき、更なる活発な交流を実現させたい。</p> <p>(2) 小中一貫教育の取り組みについて</p> <p>ア 児童・生徒数の減少と施設の老朽化対策及び不登校、学習意欲や学力の低下など、中1ギャップの顕在化があげられているが、小中一貫に移行し、中1ギャップの緩和と不当校の大幅な減少が図れ、上級生にあこがれ、下級生を思いやる気持ちが育まれ、他人を思いやる気持ち穏やかな生徒が多くなった。問題行動も減少し、確かな学業の定着成果も出ている。</p> <p>イ 新校舎は広くかつ敷地も広く、学業に集中でき、かつ穏やかで寛容な広い気持ちを持てる子供になるものと感じる学び舎と思えた。</p> <p>また、敷地が広いことで、スムーズな施設更新も可能であり、かつ校舎も広く防災拠点としての機能も有している。</p> <p>ウ 生徒全員がスクールバス通学であり、距離による定めがないとのことであった。牧之原市においては、低学年を始め距離による定めは十分検討する必要があると考える。</p>	

(考察)

小中一貫教育の効果は、学業の定着や9年生の中で問題行動の減少や思いやりの心が育まれるなど良いところが多く感じた。また、授業、自学勉強、児童生徒のコミュニティ、運動などが活発にできかつ集中を高めるための教室、廊下、教室間の動線など配置が重要な要素になるとともに、将来の施設更新時に学業を停止することなく更新可能な敷地を確保することが重要である。

2 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修

使用済み燃料輸送専用船、輸送トラック、専用の港を視察し、厳重な管理体制のもとに輸送されていることを確認した。

3 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修

ウラン濃縮工場、低レベル廃棄物埋設、中深度処分調査抗内視察、高レベル廃棄物処理管理センター、再処理工場、安全対策工事現場を視察した。

原燃は、日本の原子力技術を集結した施設であり、新規規制基準の重大事故対策やテロ対策工事、竜巻対策工事が進められ、考えられるすべての脅威から安全を確保している現状を直接見て聞き視察でき大変参考になった。

また、六ヶ所村の村民の大部分が原燃に関わり、若者も原燃に多く就職しているとのことであった。

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 村田博英

研 修 名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研 修 先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
	(1) 小中一貫教育の取り組みについて 学舎や構内の広さ、デザインなど外観上からも生徒目線で考えられていると感じた。 校長先生のお話から学びの中心は生徒であるとの強い教育者としての決意表明の言葉が印象的であった。 スクールバスの対象は全学年であり、参考にしたい。
	・ 1 三戸議会との交流会 町議員定員14名のうち改選で11名が新人とのこと、議会運営上様々な改善をおこなっている様であり、本市議会でも議会運営の参考になるのではと感じた。
	(2) 原燃輸送株式会社の視察 使用済み燃料や低レベル廃棄物の受け入れ港であるが、説明の総務部長の牧歌的な対応が印象的であった、それなりの安心感を受けた。
	(3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設 ウラン、プルトニウムの在庫が増えていることに各国が心配をしている、再処理工場の状況は問題ないと推測するが一向に進んでいない核燃料サイクル処理、エネルギーひっ迫状況の現状からみて猶予はなく国を挙げての問題とすべきである。
	以上

視 察 研 修 報 告 書

牧之原市議会議長 様

1 4 番議員 大石和央

研 修 名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研 修 先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
<p>(1) 青森県三戸町議会</p> <p>◎沿革</p> <p>H21年度 三戸小学校にて小中一貫教育要領による教育課程を実施。 同年度 三戸中学校同上。</p> <p>H25年度 三戸中学校が小学校の敷地内に移転。</p> <p>H28年5月 小中一貫三戸学園（三戸小中学校）落成式。</p> <p>H29年4月 併設型の小中一貫校（文科省令）となる（義務教育学校ではない）。 *昭和35年度から令和4年度かけて町内12小学校・5中学校を統廃合。 現在は小中一貫三戸学園（三戸小学校・三戸中学校）と斗川小学校。</p> <p>◎小中一貫教育実施の理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少子化、児童生徒数の減少 児童数 H10年846人、H20年590人、R4年337人 生徒数 H10年456人、H20年364人、R4年195人 ・施設の老朽化対策 ・中一ギャップの解消 <p>◎三戸町小中一貫教育要領</p> <p>新学習指導要領に準拠した三戸町独自要領</p> <ul style="list-style-type: none"> ア、道徳・特別活動・総合的な学習の時間を融合した新教科 「立志科」の創設（4分冊した教科書、指導書の作成） イ、小1から教科としての「英語科」の創設 ウ、基礎基本の定着や発展的な学習のためのパワーアップ学習を導入 <p>◎施設併設型小中一貫の成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不登校の減少、中一ギャップの緩和、確かな学力の定着 	

◎考察

三戸学園の施設整備や小中一貫教育は全国的に見て、比較的うまくいっている事例だと考える。しかし、それは一言で表現すると、小規模校ならではの特徴ともいえるのではないか。牧之原市の学校再編計画において、参考になるものとは必ずしも言えない。これについては後に触れる。

沿革において、三戸学園に至るには、実に長期間において小中学校の統廃合が行われてきた。当然、行政の計画について住民との間に軋轢があったと思われる。児童生徒数の減少にどのように学校を維持し、義務教育を進めるのか、それは地域や学区の存亡にもかかわる課題でもあっただろう。現在の学校の姿は、歴史的経過や議論の上での集大成とも取れる。実のところ教育委員会事務局などの説明しか聞くことができず、児童生徒をはじめ保護者や現場教師の現状評価はわからない。施設の良し悪しはさておき、一点気にかかったことは、下校時間を過ぎても帰宅しない児童が残っていた（スクールバスの都合と聞くが）が、徒歩通学ではありえない光景であった。

現在の課題として説明にあった、増加傾向にある不登校への対応、小中一貫校教育を推進する専門部門の再構築と教職員による再検討などのほか、そもそもの学校統廃合でのデメリットが潜在化しているのではないか。

議員交流で一人の議員に、統廃合で反対はなかったのかを尋ねたところ、「地域住民には反対があったが、保護者は児童が減少することでの、子どもの成長や教育効果を懸念して、賛成する傾向」であったという。三戸学園とは別に、斗川小学校はこれまで住民からの存続要望で、児童数 28 人（R3 年度）でも現在に至っている。教育行政としては義務教育学校に移行したい方針がありながら、これについては柔軟に対応しているようである。また、牧之原市の学校再編計画について説明し感想を求めると、学校児童数 400 人規模の小学校 3 校あり、その他は 100 人以上の規模という現状から、「三戸とは比較できないものであり、考えられない計画である」と驚いていた。第三者から見るとまさに奇異な計画ということである。

小規模学校を存続させるための小中一貫の選択肢はあっても良い。しかし「子どものため、教育的効果のため」といった理由は動機付けに他ならない。それは経済効率性や財政的観点を意識した考え方といえる。

以上のことから、三戸学園を評価することはできても、モデルにすることはできない。市の学校再編計画とは別物だとの意識を持つ必要がある。

（2）原燃輸送株式会社

各原発からの使用済み核燃料や核廃棄物を再処理工場などへ輸送する業務を担う。初めて見学をした。資料を回収されたため輸送業務の詳細が分からない。秘密にするような資料と思われなかったが、秘密主義の会社だと驚いている。輸送トラックや港の外観を眺めたただけなので特に感想はない。

(3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設

六ヶ所村にある施設見学は2回目である。4年前に比べて感じたことは、①低レベル放射性廃棄物（ドラム缶）埋設施設の拡張 ②MOX燃料工場の進捗（2024年度上期竣工予定）③再処理施設の竜巻災害等対策工事の進捗、等がみられた。

再処理工場はアクティブ試験開始（2006年）してから、高レベル放射性廃棄物をガラス固化することに失敗している。また東奥日報（11/16）によると、安全対策において、設計工事の認可申請（2020年12月）に、内容が不備であることから再々補正を原子力規制委員会に求められた、とあった。これらのことから稼働は大きく遠のいている。絶望的ともいわれている。また、再処理工場建設にはこれまで2兆円以上も費やしているといわれ、その必要性や妥当性が問われる。

核燃料サイクル施設、原燃には中電を含む大手9電力会社が出資しており、建設中のMOX燃料工場や停止中の再処理施設などのツケは電気料金に転嫁されている。再生可能エネルギー依存にシフトすべきで、そうすれば電気料金は下がる。現代社会の反面教材として核燃施設がある。

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 太田佳晴

研修名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研修先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
(1) 三戸町議会表敬訪問・研修・交流会	
4年ぶりの三戸町議会への表敬訪問であったが、いつもながらの心温まる歓迎を受けてたいへんに感激をした。	
時間の都合があり仕方がないことだが、交流の時間が極めて短時間のため多くの議員の皆さんとお話が出来なかったのは少し残念であった。しかし、交流会で隣り合わせの議員の方とは、自分と同じような境遇で農業にも従事しているということで会話が弾み心地よい時を過ごすことが出来た。三戸町議会も、早いタイミングで牧之原市への訪問を考えているとのことでしたので、皆さんとの再会がとても楽しみである。	
このような形で両議会が定期的な交流を重ねていくことにより、双方のまちのいろいろな立場の人たちの交流がより深まっていくことが、議会による表敬訪問の意義だと思いますので、今後も友好的な交流が続くよう取り組んでいくべきと考えます。	
交流会に先立ち行われた三戸町の小中一貫教育の研修では、あらためて三戸町の教育に対する先進性を強く感じ取ることが出来た。	
合併により牧之原市が誕生しスタートした頃に、三戸町では既に「小中一貫教育学校導入」に向けた機運が高まっていたというのは驚きである。	
10年ほど前であると思うが、私が所属した文教厚生委員会では、小中一貫校を全国で初めて開設したという広島府中市を訪問して、その成果を牧之原市でも反映させようと提	

案を試みたが、当時の牧之原市教育委員会では「小中一貫教育」を導入する考えは無いと
のことであった。今後、牧之原市の学校再編が進み、予定取り 2030 年に新しい学校が開校
しても、三戸町の小中一貫教育の導入には 20 年の遅れを取ることになり、今更ながらでは
あるが先進的取り組みに対して、参考とさせていただき大いに学ぶべきと強く感じた。

(2) (3) 原燃輸送株式会社・日本原燃株式会社 視察研修

視察した両社ともに、国策である日本の原子力発電の屋台骨を支えるたいへん重要な役
割を担う会社である。

地球温暖化の影響なのか真実は分からないが、私たちの住むこの地域でも、自然災害の
脅威が確実に身近に迫ってきていることを最近強く感じる。そして、二酸化炭素の排出量
が影響して、竜巻や大型台風が発生し様々な自然災害をもたらしているとしたら、今後、
私たちはより真剣にこの問題に対して、身近なところからの対策は当然のことながら、国
民一丸となりこの問題を取り除いていく大きな責任を持っている。

私は、専門的なことは全く分からないが、人類は原子力を確実に制御出来る時は来るの
だろうかと常々考えている。どのような状態を確実な制御といえるのかは疑問もあるが、
それを目指していかなければ地球の未来が危ういとも思う。なぜならば、より安全に原子
力を制御する技術の向こうには、人類が作り出す、より安全で地球に優しい新しいエネル
ギーが誕生する可能性が、技術の進歩により高まっていくと思うからである。

今回の六カ所村での視察では、普段私たちが目にすることはない放射性廃棄物埋設の最
前線の現場を案内していただきましたが、必ず未来の人類は、現在では解決できない問題
も解決し、少し壊れかけた地球を新しいきれいな地球に必ずリセットをしてくれるだろう
と考えます。埋設されていく放射性廃棄物が未来への負の遺産ではなく、人類が地球上で
ずっと先の未来まで存続していくための、新たなエネルギーを生み出すまでの一時の架け
橋のようなものであってほしいと願いました。

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 原口康之

研修名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研修先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
<p>(1) 三戸町議会表敬訪問・交流会では、前回同様、町役場職員挙げての拍手による歓迎を受け和やかな雰囲気の中で交流会が行われた。両市町の交流が更に深まった事が確認できたと思う。懇親会では、打って変わり参加者全員が打ち解けた時間を過ごすことができ三戸町議会議員、当局、事務局全員に感謝すると共に、その真心をお返しする為にも、三戸町議会の今年度内の牧之原市訪問が実現し再会を楽しみにしたい。また、両市町の交流事業が、末永く続くことを願う。</p> <p>研修のテーマの「小中一貫教育の取り組みについて」では、生徒の精神や心の問題点のメリットはあると私の経験からも考える。幼少期から思春期の青少年の健全育成には効果があると思う。具体的な取組についてはハード面ではやはり施設一体型が有利と思われ三戸町の施設に関しては広さに余裕があり、牧之原市では、確保は困難では。また、スクールバスに関しては、生徒数も違うので街づくりや一般の乗客を含めた公共交通機関としての検討も必要と考える。ソフト面では牧之原市としての小中一貫義務教育学校として市民への周知、コミュニティスクールや学校運営、カリキュラム等の人材育成がこれからの課題と思われる。</p>	
<p>(2) 国のエネルギー政策に挙げられている原子力発電の原子燃料サイクルを支える会社で使用済み燃料輸送容器とガラス固化体輸送容器自体が100トンを超え、専用の輸送車両も一般の生活においては見る事のないスケールだった。</p>	

今後は、原子燃料サイクル確立に向けた新たな輸送業務にも着手していくということだが国民（市民）の安心の上に成り立つ事業だと思っているので安全基準を順守し、安心・安全の事業運営をお願いします。

(3) 現在の牧之原市においても、ロシアのウクライナへの侵攻の影響による原油、天然ガスを含む物価の高騰により、電気料金も生活費にのしかかる割合も増えている状況。

東日本大震災以降、安全基準をクリアした原子力発電所から、徐々に稼働している状況だが、近年国のカーボンニュートラルの政策もあり、エネルギー政策も並行する意味でクリーンエネルギーでもある原子力発電所の稼働についても検討が進んでいる。

原子力発電所の要である原子燃料サイクル施設の視察研修ということで、前回は行けなかった低レベル放射性廃棄物の中でも、「放射能レベルの比較的高い廃棄物」の埋設に関する調査・研究が行われた地表面から地下 100m の地点まで今回視察した。安全基準は分からないが安心のレベルではないかと考える。

国の政策として、原子力規制委員会が浜岡原子力発電所を含む必要な原子力発電所に対ししっかりしたその地域に沿った安全基準を示し、基準をクリアして、住民（市民）の安心・安全確保した上で、一日も早く安定したクリーンエネルギー供給に繋がる事業運営をお願いします。

視察研修報告書

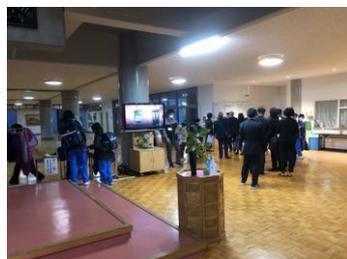
牧之原市議会議長 様

氏名 濱崎 一輝

研修名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研修先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
(1日目) ◆ 青森県三戸町議会 牧之原市と友好姉妹都市である三戸町に表敬訪問し、三戸町が取り組んでいる「小中一貫教育の取組について」研修を受けた。前回も小中一貫教育の取り組み状況について 研修を受けたが、今回は施設一体型の学校施設を現地視察させていただきながらの研修であったので、牧之原市が目指す施設一体型義務教育学校のイメージが掴めた。 (特に印象に残った点や参考にしたい点) ● 小中一貫教育を実施する経緯は、①少子化による児童・生徒数の減少②施設の老朽化③中一ギャップの顕在化の3つの課題であり、これは全国どの自治体においても、避けては通れないものである。 ● 中一ギャップは学力の低下だけではなく、いじめなどによる不登校などが大きな問題となっていたが、小中一貫教育を実施することで中一ギャップの減少と不登校が減少。そこには、小中学生が一緒に清掃等の活動や学校生活を送ることにより、中学生が小学生の手本となるべく意識した行動を取るようになり、問題行動も減少したことが大きな効果として挙げられていた。 ● 三戸町は独自の教育要領を定め、ふるさとを愛する心を育てる「立志科」の創設、小学校1年生から「英語科」を導入、毎日15分間のモジュール学習の時間（パワーアップ学習の実施）など、独自性のある取り組みを実施している。小中一貫教育のメリットを周囲に周知することで、保護者や地域への理解を深めており、牧之原市においても市独自の特色のある教育を全面的に打ち出していく必要性を感じた。 ● 三戸町には、施設分離型と施設一体型の2つの小中一貫校があるが、具体的	

な小中一貫教育の成果が表れてきたのは施設一体型にしてからのことで、2つの異なる学校施設があるからこそ比較ができおり、大いに参考になった。

- 発達段階に配慮した4-3-2制を導入し、初等部（4）では集団の結束力-中等部（3）では役割の自覚-高等部（2）では生き方や進路と目標を定めるなど、各等部においてしっかりとして目標が立てられており、段階に応じた確かな学力が定着してきているようだった。
- 学校施設内は児童・生徒が自由に行き来でき、お互いに交流できる環境は双方の子どもたちにとっても大いに刺激になり、通常の小学校や中学校では味わえない何とも言えないワクワク感を感じた。実際に小学生と中学生それぞれに声を掛けて話しを聞いてみたが、本当に学校が楽しそうだった。



(2日目)

◆ 原燃輸送株式会社、日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
前回は、日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設のみの視察であったが、今回はこの施設に加えて、原燃輸送株式会社も現地視察させていただいた。両施設共に普段なかなか入ることも見ることもできない施設だけに、とても貴重な体験ができた。

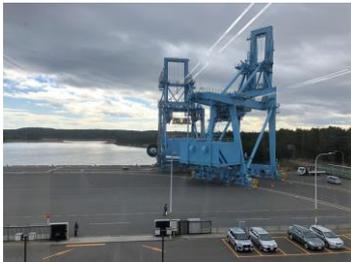
(特に印象に残った点や参考にしたい点)

【原燃輸送株式会社】

- 日本の原子燃料サイクル事業を支える会社であり、天然六フッ化ウラン、低レベル放射性廃棄物、使用済み燃料、返還ガラス固化体の4つの輸送を行っているため、専用道路を通り厳重体制のもと日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設まで輸送されている点が印象的だった。
- 特殊車両を配備しており現車を近くで見ることができたが、その規模に圧倒された。

【日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設】

- この施設の視察は2度目となるが、改めて規模やスケールの大きさに圧倒された。
- あらゆる自然災害に対する対策が施されており、中でも竜巻に対し最大限のリスクを想定した設備が整っており、感心した。
- 六ヶ所村は小さな町であるが、この施設と共に共存した地域密着型の取り組みがなされている印象を受けた。それは、この施設で働いている人の状況を見れば一目瞭然である。（従業員の約64%が青森県内出身者）
- 前回は見る事が出来なかった、放射能レベルの比較的高い廃棄物埋設に関する調査・研究のために掘削した試験空洞（地表面から約100m）は、今後どのような場所に廃棄物を埋設しようとしているのかを確認することができ、知見を広げることができた。
- 日本が原子力エネルギー事業を行う上で、この施設はなくてはならないものであると再認識できた。



視 察 研 修 報 告 書

牧之原市議会議長 様

氏名 種 茂 和 男

研 修 名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研 修 先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
(1) 青森県三戸町表敬訪問・研修・交流会・研修テーマ「小中一貫教育の取組について」	
みんな なかよく 共に学び共にはぐくむ、を念頭に～心豊かでたくまし児童生徒の育成 を目指して～で三戸町の小中一貫教育に取り組んでいます。	
主に確かな学力・・夢に向かい学び続ける子・豊かな心・・ふるさと三戸町に誇りを持ち 次代w p担う子 ・健やかな体・・基本的な生活習慣が身に付いた子	
●確かな学力 ・三戸町独自の小中一貫教育要領を作成・英語科（小学校）に導入 ・小中学校の乗り入れ授業 ・パワーアップ学習 ・町独自の副教材の作成（理科： サイエンスサポートブック、社会科：地域学習副読本）●豊かな心 ・立志科（道徳 ・特別活動・総合的な学習の時間を融合）の創設 ・発達段階に配慮した4・3・2制 による滑らかな接続 ・異学年交流 ・連携校や異校種との交流 ●健やかな体 ・ 早寝早起き朝ごはん運動（生活リズム講演会、睡眠記録による生活習慣の調査など） ・栄養教諭等を中核とした食育の推進 ・体力測定の結果に基づいた授業や諸活動の展開	
●最終的には統合し、人事は教育委員会で決めたようですね！また上級生が下級生を めんどろ見て良い学びの環境ができていたようでした。当市も色々な話し合いを重ね 良い小中一貫義務教育学校に成るように取り組んで行きたい。	
(2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送についての視察研修	
特に「安全」で「確実」な輸送を行うために日本の原子燃料サイクル事業を支え、安定し た電力供給の確保に寄与する。日本で唯一の原子燃料等の輸送専門企業です。	

とにかく原燃輸送株式会社は原子力燃料サイクルの翼を担い、原子力発電所を起点にして再処理工場、燃料工場が一つの輪として結ばれており、この施設と施設の間を輸送で結ぶ重要な役割を果たしているのが原燃輸送株式会社の仕事に成ります。

●海路から陸揚げ、陸路へと万全の安全対策を講じて原子力燃料サイクルを支えています。

●説明を聞き、各担当部署が的確に安心・安全に責任とチェックを確実にして、施設間を確実に輸送している会社の姿勢が見られ安心しました。

(3) 日本原燃株式会社にて原子力サイクル施設を視察研修

・主に再処理工場の各工程から採取した試料を分析・評価できる分析技能者を確保する目的に作られた会社で試料の分析とその関連業務を行うとともに、分析技術者の養成・訓練、ガラス固化施設などの部分的な工程の運転業務の請負等を行っている。

主な業務は原子力施設の係る分析、計測及び計量の仕事です。

●再処理工場として最大処理能力は800トン・ウラン/年 使用済燃料貯蔵容量は

3000トン・ウラン ●高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター ・返還廃棄物貯蔵

容量はガラス個体2,880本 ●MOX燃料工場は最大加工能力は130トン-HM1/年

・製品は国内軽水炉(BWR、PWR)用MOX燃料集合体 ●ウラン濃縮工場 ・150トン

SWU/年で操業開始、最終的には1500トンSWU/年の規模に成ります。

●低レベル放射性廃棄物埋設センター ・124,672立方メートル(200リットルドラム缶623,360本相当)最終的には約60万立方メートル(同約300万本相当)

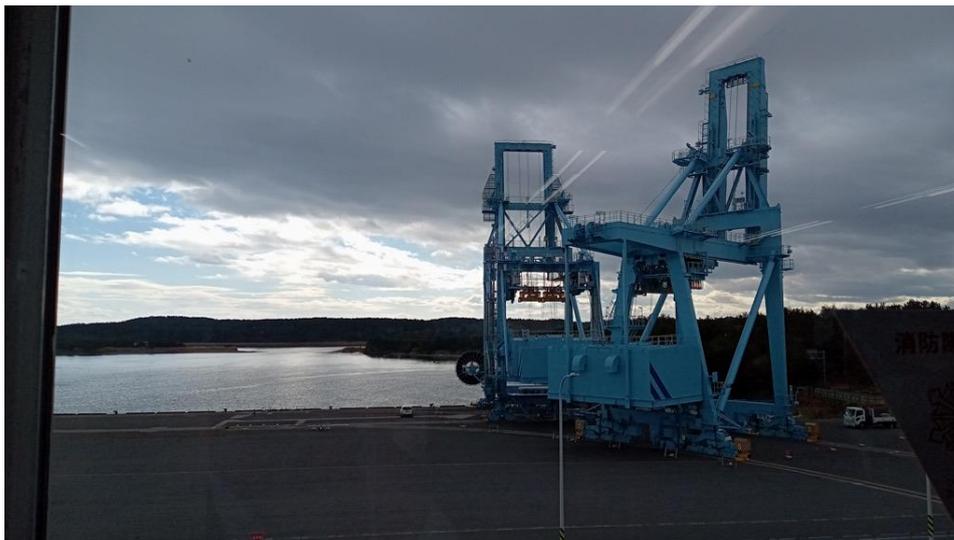
●各部署で確実に原子力サイクルできるように考え取り組んでいる姿が見れ、安心しました。百聞は一見に如かずで、やはり研修視察することは大事ですね。

写真

<三戸町の小中一貫教育パンフレットより>



<原燃輸送株式会社>



<日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設パンフレットより>



視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 松下定弘

研 修 名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研 修 先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
(1) 「小中一貫教育の取り組みについて」	
研修先：青森県三戸郡三戸町大字梅内字権現林1番地「三戸学園」	
三戸町教育委員会事務局長の「上田義貴」様から小中一貫教育のハード面についての説明	
を受けました。小通一貫教育を実施するに至った経緯は、3点あげられます。	
ア・少子化による生徒数の減少 イ・学校施設の老朽化 ウ・中一ギャップの顕在化	
いずれも、牧之原市が抱える問題と似ています。そして、発達段階に配慮した4-3-2制の	
3段階に分けた義務教育を行っていました。初等部・中等部・高等部とした取り組みは、	
牧之原市においても同じ考え方で参考になりました。教育で特徴があるのは、「立志科」という	
道徳を教育課程特例としている点や、初等部の2年目から「英語科」の導入、また	
中一ギャップ対応策として基礎基本の定着や発展的な学習アップのためのパワーアップ	
学習の導入など、参考になりました。こうした取り組みによる学力アップなど、結果が	
現れていました。次に、事業着手までの経緯や、建物など施設のハード面の説明です。	
やはり、こうしたハード面は実際に現場に行き見て聞いた方が確実に参考になりました。	
廊下や教室内・ふれあい広場・体育館・職員室などすべての施設を見て感じたことは、	
とにかく「広い」でした。天井も高く、すべての窓が大きい作りです。	
児童も大きな声で、元気よく挨拶してくれて、楽しそうな学びの場を雰囲気でもわかります。	

下校時の訪問でもありバスで帰宅する児童は、乗車時間に1時間近く待たなくてはなら

ない問題点もありましたが、各々図書室やふれあい広場で楽しそうに待っていました。

最後に校長先生の挨拶では、「子供たちは大人が考えたこの施設に馴染むか疑問でした
大人が思うより、はるかに子供たちの順応能力の高さに驚いた点や、小中一貫教育で
高等部の生徒が初等部に対する優しい気持ちが芽生えていることが大変良い結果と結び
ました。確かに初等部や中等部へ手本となる意識が強くなることは子供たちを見ていて、
感じました。牧之原市でも、「ゆとりある教育の場」としてソフト・ハード面で子供達
に良い環境づくりを提供できるための参考になりました。。

(2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修

研修先：青森県上北郡六ヶ所村大字鷹架字発茶沢 133-11 原燃輸送株式会社

使用済みになった燃料の輸送として、地域住民の皆様に対し負荷にならないよう慎重に
船舶からくる廃棄物などの処理に、移動ルートや特殊移動車両および、天井型クレーン
などの見たことのない機材を見て、核燃料の危険な廃棄物処理に最先端の技術を拝見し
ました。説明頂いた職員の方から、創業当初は反対者の集会も多く、なかなか理解を得
る事がありませんでしたが、現在ではそうした集会など、殆ど見られなくなりました。

「安全」に対する地道な作業などに取り組まれてきたからこそその実績と思いました。

また、説明使用した資料などは、返納する徹底した取り組みに「安全」意識しています。
やはり「安全」に対する最優先無くしてこうした事業は成り立たないと強く感じました。

(3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修

視察：青森県上北郡六ヶ所村大字尾駈2番地42 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
廃棄物は、避けては通れない絶対条件。核廃棄物の収める最大施設の場所の視察です。

廃棄物処理に関しては、細心の注意と管理が必要であり、セキュリテーの最新技術で、
移動する施設それぞれにチェックポイントがあり、作業する人や職員の方の意識が高く
感じられました。見学時間では、全てを見切れないほどのとても広い敷地内でした。

また、廃棄物の処理場である地下倉庫へも見学できました。低レベル廃棄物などの
埋める施設も車窓から見学しました。いずれも、世界に比較して日本の廃棄物に対する
意識の高さと、技術そしてあらゆる状況を想定した管理意識の高さに感心しました。

ここでも、「安全」への意識の高さと取り組む姿勢が絶対条件と考えます。

広大な土地を利用した地域住民へ還元する野球場や様々な施設の取り組みにも良い点と
考えます。私たち資源の少ない日本では、生活に必要なエネルギーの需要確保は重要な
課題です。「安全」に対する取り組みを私たちがしっかりと見ていかなければならない
当然ではありますが、改めて強く感じました。

他、バス移動の際に立ち寄った「道の駅」施設は、これから牧之原市の「坂部道の駅」

建設には、良い施設見学として参考になりました。

休憩を兼ねて立ち寄った道の駅施設

- ・SAN・SAN 直産ひろば（三戸町）・八食センター（八戸）・道の駅なんごう（六ヶ所村）
- ・ユートリーVISIT はちのへ（八戸市駅前）

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 6番 木村 正利

研 修 名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研 修 先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
	(1) 「小中一貫教育の取組について」
	三戸町において 小中一貫教育の取り組みについて。事業着手までの経緯が 検討委員会 設置より開校委員会設置まで5年。工事着工から開校まで2年間 合計7年間 要している 牧之原市の計画期間が8年間ということは 時間的にかなりタイトであると感じる。 子供ファーストで考えた場合、無理せずに 進めていく方向でも良いのではないかと思う。 今回の視察で 学校の広さに驚いたこと。 また 開放感は子供たちの育成に欠かせないと 感じた。 三戸の校長の経験談として、 当時 青森でも あれていた中学校が再編してから 落ち着いた学校に 変化したことは、牧之原市においても再編の意義を感じた。 “子供ファースト” で進める事と改めて願う。
	(2) 原燃輸送株式会社
	電力会社10社他が出資して、国内海外からの、天然六フッ化ウラン、返還ガラス固化体、 低レベル放射性廃棄物、使用済燃料など4つの原子燃料サイクルを支えている会社。 容器・運搬船・陸上輸送車・岸壁移動大型クレーンなどを保有して、燃料搬入時置ける 安全確保の説明を受け、原子燃料サイクル施設と切っても切れない関係が良く理解 出来た。
	(3) 日本原燃株式会社
	日本における原子燃料のサイクル施設を視察して
	① 原発より発生する使用済み燃料の処理は必須である。

② 福島原発メルトダウンによるリスクにより安心・安全の基準が見直されている。

③ 六ヶ所村の総人口、1万人未満の所に平均8,000人/日当たりの人が働いている。

④ 使用済燃料6本を再処理すると、MOX燃料1本とウラン燃料1本とガラス固化体3本に分けられ、低減に10万年かかる高レベル放射性廃棄物6本がガラス固化体に3本になると低減期間がウラン並みの8千年となる。

⑤ 放射線の影響について、再処理工場の評価値を一人当たりレベルを0.022ミリシーベルトで考えている。

以上5つの事から、特に、安心・安全について新たに竜巻対策として、毎秒100mと設定した事、火山対策として、20万年前の八甲田山の噴火を考慮に最大55mの火山灰が降る対策を盛り込み対処している事など常に前向きな検討している事に感動した。

牧之原市においても、中部電力浜岡原子力発電所では、安心・安全について、失敗から学ぶ回廊、年間700回以上の訓練の実施、また、停止後もいつ稼働しても良い状況のシュミレーション対応など、国民にとって、必要不可欠のエネルギーについての安心・安全は、お金に換えられないと日本原燃株式会社及び中部電力株式会社の姿勢を感じた。

2泊3日間の視察において、先輩方の歴史があつての交流であり、初めての視察でしたが三戸町の松尾市長始め議員の方々の暖かいおもてなしを感じた。

学校視察においても同様な、おもてなしにより大変参考となった。

原子力発電については、廃炉についての課題。廃棄燃料処理の問題等避けられない課題は、数多くあると認識しているが、ロシアによるウクライナ侵攻が日本経済に落としたリスクを考えると安心・安全を担保しながら稼働する選択も必要と考えていた中、中部電力視察今回の日本原燃視察は、改めて、安心・安全は担保されつつあることが認知できた。

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 加藤 彰

研 修 名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研 修 先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
(1) 小中一貫教育の取組について	
公立の小中学校は、標準規模が全学年で12～18クラスと法令で定められている。小学校は1学年2～3クラス、中学校は4～6クラス。三戸町で小中一貫教育を実施するに至った経緯によれば、町が抱えていた課題の一つに、少子化による児童・生徒数の減少が挙げられている。H25年4月1日に、校舎施設設備一体型小中一貫校として開校。現在、「初等部」「中等部」「高等部」の4-3-2制の学年割をとり、全学年で18クラスとなっている。	
また、当町、二つ目の課題として、施設の老朽化が挙げられている。現在校舎は、小学校と中学校を結ぶ形で職員室や小中の共有スペース、特別教室が配置され、日常の教育活動において1学年～9学年が自然に交流できる設計となっている。また、平成27年度末に400mトラックを有する第2グラウンド、野球場、テニスコート、相撲場等に加え、駐車場や町民プールなどの施設が完備し、充実した教育環境となった。三戸町は適切な学校規模が維持できなくなったことが主な要因であり、統合の形態は、小中学校の統合で設置。統合の結果、通学手段としてのスクールバスを導入（スクールバス6台、スクールタクシー3台、年間の費用は、令和3年度実績で41,258千円）。部活動が抱える問題には、様々な事柄があるが、その一つに教員の多忙化によって部活指導にまで時間を割けないことなどが挙げられているが、三戸町の課題については、把握できなかった。また、中1ギャップの顕在化が三戸町の課題に挙げられていたが、不登校の現状については、全国的な傾向にあると感じた。インクルーシブ教育の推進に当たっては、全学年の児童生徒の実態に応じ	

た支援を行っている。

(2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設

原燃輸送株式会社は、各発電所内で検査を行った後、低レベル放射性廃棄物埋設センターへ輸送（日本で唯一の原子燃料等の輸送専門機関）。日本原燃株式会社は、原子燃料サイクルの確立を目指し「ウラン濃縮工場」「高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター」「低レベル放射性廃棄物埋設センター」の3施設を操業するとともに、使用済燃料をリサイクルするための「再処理工場」および「MOX燃料工場」の操業に向けて取り組んでいる。

従業員数3,142名の内、約64%が青森県出身者。2022年度新入社員（80名）の内、青森県出身者は64名。プロパー社員の割合は約89%。協力企業数は役1,200社。現地就労者数は平均して約8,000名/日。

原発の使用済み核燃料は、再利用できるウランとプラトニウムを抽出（再処理）し残った廃液をガラスで固め高レベル放射性廃棄物として、地下深く埋設処分する。高レベル放射性廃棄物は、原発の使用済み核燃料を再処理する過程で発生する。再利用できるウランやプラトニウムの回収後に残った廃液を、ガラスと溶かし合わせ筒状のステンレス製容器に流し込んで固める。「ガラス固化体」とも呼ばれ、高さ約1.3m、直径40cm、重さ500kg。強く危険な放射能を放ち、十分に安全なレベルに減衰したとみなせるまでの期間は数万～10万年とされる。国は、地下300mより深い地層に処分すると決めている。

2021年3月末時点で国内にあるガラス固化体は約2500本。大半が六ヶ所村の施設に一時貯蔵管理されている。各地の原発で保管される使用済み核燃料を今後再処理すると、既存分と合わせて2万6千本相当になる。

再処理工場は日本原燃が六ヶ所村で建設中だが、トラブルや東京電力福島第1原発事故の影響で、完成が20年以上遅れている。日本原燃の工場は当初7600億円だった建設費が、3兆円となり廃止までの総事業費は14兆円を越す見通しである。

日本世論調査会が行った原発に関する全国世論調査によれば、使用済み核燃料からプラトニウムなどを取り出し、燃料として再利用する「核燃料サイクル」は57%が実現を疑問視。高レベル放射性廃棄物を地下深く埋める処分計画も76%が「安全だと思わない」とした結果である（調査はR4.1～2月、全国の18歳以上の男女3千人を対象に実施）。

仮に原発の安全性が向上したとしても、核燃料サイクル事業は停滞したままで、使用済み核燃料の処理から出る高レベル放射性廃棄物の最終処理もめどが立っていない。

これまで以上に透明性や地元への情報提供が大切になると感じている。

視 察 研 修 報 告 書

牧之原市議会議長 様

氏名 名 波 和 昌

研 修 名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研 修 先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」
	⇒人口約9,200人のまちながら、すでに平成25年度から二つの一貫校教育が開始されている。どちらも牧之原市が進めている「義務教育学校」ではないが、9年間を3つのフェーズ(4.3.2)に分けて教育プログラムを策定していることに驚きを感じた。
	この方法がベストであるかは判断までできなかったが、当市の今後の方針に大いに役立つものとする。また、三戸学園は想像以上の規模(約8ha)であり、生徒がゆったりと学習できる環境であると認識した。特に参考となった点は、学校建設方法である。既存の小学校に中学校部分を増設して全体を完成させたとのことから、当市における小中一貫校の建設方法に大いに役立つものとする。
	⇒三戸町役場町職の出迎えには感動した。日本人の「おもてなし」の心をあらためて見つめなおす機会となった。また議員の皆様も農家の方もおり親しみを感じた。
	三戸町も当市と同様に人口減少が大きなテーマであり、子育て支援、移住定住促進等を進めている中で一定の効果は出てきているが、増加に転じてはいないという当市と同様な懸案事項となっている。やはり人口減少については全国の市町の対策を参考にするだけでなく、当市独自の方策を模索していかなければ活路がないものとする。

(2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修

⇒現在は各地の原子力発電所が稼働していないことから、ここも閑散としていた。

ここに使用済み核燃料が輸送された当初は反対運動が盛んであったようだが、安全管理の浸透とともに現在は全くなくなっているとのこと。港周辺に民家がなく適していたこともひとつの要因と感じた。今後各地の原子力発電所再稼働していく時点では、あらためて「安全・安心」についての議論が始まるのではないかと考える。

(3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設

⇒まずは広大な敷地に驚愕した。六ヶ所村全体の人口が約9,900人のなか、この施設には約3,100人の従業員が従事している。また、青森県出身者約2,000人であり雇用には大きな役割を担っている。

使用済み燃料の再処理過程の安全管理が確実に行われていることが確認できたし、ここに低レベル放射性廃棄物が埋設されていることを初めて認識した。今後は高レベル放射性廃棄物埋設場所を探索していかなければならない状況ではあるが、候補地も2か所ほどが手を上げているとのことから少しは安心することができた。

ここも原燃輸送(株)と同様に近隣には民家もなく、さらにまだまだ活用できる敷地も多いとのことではあるが、原子力発電施策とともにどのようなようになっていくかを注視していきたく考える。

<まとめ>

今回初めて行政視察を経験したが、事前準備が不足していたことを反省する。三戸町についても、ウェブサイトから議会だより等をしっかり閲覧していれば町議会議員に皆様との交流がより深まったと思う。

また、視察先への途中で立ち寄った「道の駅なんごう」は、売店だけではなく宿泊施設や観光農園等が併設されており、牧之原市が計画している、「坂部 道の駅」の建設計画に大いに参考になると感じた。やはり売店だけでは、よほど希少価値があるものや人気があるものがないと集客は望めないと推察する。

今回の視察を実のあるものとすべく、市民・市政に貢献できるよう、引き続き努力していく所存です。

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 絹村智昭

研 修 名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研 修 先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修のこう ない目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
<p>(1) 青森県南端に位置する学校で、平成25年に校舎施設設備一体型小中一貫校として開校し、創立10年目を迎えた小中一貫三戸学園を視察した。大きな特色は・三戸独自の教科「立志化」の実施・小学校1年からの「英語科」の実施・「パワーアップ学習」の実施である。この3つの施策を手立て、4-3-2制の学年の区切り、乗り入れ授業の実施及びTT指導の充実、グループリーダー制による教職員業務改善の推進を実践している。校舎は小学校中学校を結ぶ形で1学年～9学年が交流できる設計になっている。校内を歩くと天井は高く、ガラス窓が多く、明るく開放的な空間であり、教室では元気な明るい声が響いていた。また、2つのグラウンド、野球場、テニスコート等に加え、駐車場や町民プール等の施設が完備し、充実した教育環境となっている。学校に通いたい通わせたいと思える視察先でした。</p> <p>(2) 原燃輸送(株)では、使用済み燃料の輸送について説明を受けた。天然六フッ化ウランの輸送、高・低レベル放射性廃棄物の輸送、原子燃料サイクルの要となる再利用に向けた使用済み燃料の輸送を担当している。海上輸送された燃料を巨大なクレーンで引き上げ、陸上輸送では特別な大型車両で輸送する。輸送する道も専用道路で車両が安全に輸送する対策ができていることが理解できた。</p> <p>(2) 日本原燃(株)では、再処理工場、MOX燃料工場、ウラン濃縮工場、高レベル放射性廃棄物貯蔵管理施設、低レベル放射性廃棄物埋設施設、参考で「放射能レベルの比較的高い廃棄物」の埋設に関する調査・研究をした箇所を視察した。現在、高レベル放射性廃棄物貯蔵量は1830本(浜岡原発分は195本)、低レベル放射性廃棄物埋設量は浜岡原発からは33999本となっている。数多くの協力会社も安全対策工事に携わっているが、原子力の更なる安全対策を求めている。</p>	

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 谷口 恵世

研 修 名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研 修 先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
	(1) 小中一貫三戸学園での研修
	・学校の雰囲気が以前より穏やかになった
	・ホールが校内の各所にあり、様々な使用ができることがとても良い
	・子どもたちは小中一貫教育にはすぐに慣れ、適応できる
	・天井が高く、広く開放感がある
	・球場・陸上競技場・駐車場等の十分なスペースがある（敷地面積8.8ha）
	・通級・特別支援教室施設の充実
	・下校時のバスの時間帯が適時でないため待ち時間がある
	・相良小学校の「ふるさと科」のような教育を取り組んでいきたい
	(1) 三戸町議会表敬訪問
	・「11ぴきのねこのまち三戸町」町中に11ぴきのねこのモチーフがあり 統一感がある
	・友好都市の絆を感じるおもてなしをいただいた
	・人口比率からすると三戸の議員数はかなり多いと感じた
	(2) 原燃輸送株式会社
	・六ヶ所村周辺は原野が多く、原子燃料サイクル施設の場所としては条件が整っている のではと感じた
	・操業当時は反対者運動もあったようだが、今では、地域の活性化と地場産業の振興に 貢献し、地域との関係性は良好であるとの説明でした

視察研修報告書

牧之原市議会議長 様

氏名 石山和生

研 修 名	令和4年度 牧之原市議会全議員視察研修
研修の期間	令和4年11月14日(月)～11月16日(水)
研 修 先	(1) 青森県三戸町議会 (2) 原燃輸送株式会社 (3) 日本原燃株式会社原子燃料サイクル施設
研修の目的	(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 (2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 (3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修
<p>(1) 友好都市青森県三戸町議会表敬訪問・研修・交流会 研修テーマ：「小中一貫教育の取組について」 小中一貫教育について質問できる時間が短かったなど感じた。せっかく来たので、問題点や今後の課題などを深く話を聞きたかった。スクールバスの運用が三戸の規模で4000万円とのことだったが、牧之原市の規模でやる場合、どのくらい予算になってしまうのか。そこを今後見ていきたいと感じた。また、学校の跡地はまだまだ活用されていないという話も聞き、その課題については、牧之原市はしっかりと進めていかないと危ないと感じた。</p> <p>(2) 原燃輸送株式会社にて使用済み燃料の輸送について視察研修 日本のすべての原子力発電所の燃料の輸送を行なっている会社ということで、理解が深まった。印象的であったのは、六ヶ所村として日本の原子力発電所を支えるという意思決定の凄さであった。日本として誰かが担わなくてはいけない問題を、誰が担うかという課題を考えさせられた機会となった。このような問題が自分の自治体に出てきた時には、慎重に、しかし、冷静に論理的に判断していくべきであると感じた。</p> <p>(3) 日本原燃株式会社にて原子燃料サイクル施設を視察研修 原子力発電所の燃料サイクル過程を学ぶことができ、よかった。反対派、賛成派いずれにしても、燃料の最終行き場は必要であり、現在日本には高エネルギー燃料の最終行き場はまだ決まっていないということで、上で述べた問題が顕在化している。低エネルギー燃料の処理に関しては、地中にしっかりと埋めて対応すれば大丈夫とのことを説明いただいた。日本は燃料処理に関しては世界で一番厳重に扱っているとの説明もいただいた。</p>	